

AIマスクはいかがですか？

「AI」マスク

5年 W・Kさん

自分がいやになったとき、選べる道は二つある。一つ目は、どうしたら、いやな自分とうまくつきあえるか考えるという道。そして、二つ目は、いやな自分を変える道だ。この本は二つ目の方法の話である。

現在の社会では、いろいろなことを機械にたよっている。この話に出てくる「AIマスク」もその一つだ。なぞのピエロが売るAIマスクをためした四人の小学生の話である。

私の本を読み終えたあと、一番心に残ったのは、大久保先生の「はげますことまでAIにまかせてしまつてよいのか」というセリフだ。自分を変えることも同様、つまりAIにたよらずぎてはいけないと思う。

だって、きつと、これからの人生、自分や他人のいやなところを見つけることがたくさんある。そういう時に、機械にたよつてばかりで良いのだろうか。人間にはある程度、いやなところをみとめたり変えたりする能力が必要なのではないだろうか。

でも、やはり、いやなところをみとめたり変えたりするのは大変だ。自分の良くないところをみとめたい人はいないだろう。

だから、AIに助けてもらえば良いのだ。一話目のリナがいい例だ。リナはAIマスクを使うことで新しい気つきを得て、一歩前に前進した。そして、AIマスクを使わなくなった。これが、AIの正しい使い方だと考える。AIに全てまかせてはいけない。AIはあくまで人間の「助手」なのだ。

だから私は、自分がいやになった時は、AIなどの助けをかりながら、どちらの道を選らぶか決め、実行すると良いと思う。そして、AIを「助手」とする考え方は、AIが発達し機械化の進む世界を生きていく私たちに、必要になっていくのかもしれない。